

「幾何学の起源」再考

ーフッサール現象学のリサーチ・プログラム

稲垣 諭

キーワード：現象学、フッサール、ハイデガー、幾何学の起源、技術

はじめに一研究史と四つのテーマ

これまで私は、フッサール現象学の記述的なアプローチを土台に、リハビリテーション医療、精神医学、荒川修作の建築プロジェクト、環境デザインといった多様な問題領域に取り組んできた。最近では、人間の「性」や人間を取り囲む「道具」の問題へと関心が広がっている¹。一見すると取り留めのないようにも思えるが、そこには一貫した哲学的なテーマがある。そしてそれは後述する「幾何学の起源」というフッサールが晩年に考察し、多くの哲学者に影響を与えた人間存在に関わる問いと深く共鳴している。端的にそれを言い表せば、人間の存在可能性の輪郭を境界づける技術の出現という問題である。

本稿は初めに、私を導いてきた四つのテーマを明らかにし、そこから改めて、フッサールが辿った幾何学の起源の問いへと踏み込んでみる。それは、フッサールやデリダが企画しつつも、展開できずに留まったリサーチ・プログラムを再始動させることでもある。とはいえ、本稿だけでこの課題を完遂できるとはとても思えない。その意味でも以下は、プロジェクトの下図のようなものとなることは止むを得ない。

2007年に博士論文を改編し、出版した拙書である『衝動の現象学』の序文は以下のように始まっていた。

「現象学の創始者エトムント・フッサールは、書きながら考える人であった。つまり、考えたことを書きつけるのではなく、書くという身体を伴った行為が同時に考えることであったということである。書くことなしに考えることはできず、考えることがすなわち書きつけることなのである。時代の哲学者と呼ばれたものが使うにはあまりにも質素な紙、例えば新聞広告やカレンダーの裏面といったところにさえ、彼は止め処なく溢れる思惟を書き残している。こうしたことを実践できる人間はそういない」²。

これは、フッサールの手書きの草稿をケルンのアルヒーフで見たときの所感でもあり、彼が特殊な読解技術が必要な速記法（ガベルスベルガー式）を習得していたことと、いまだ出版が終わらない膨大な手書きのマニュスクリプトの量（40000頁以上とも言われる）からも類推できることであった。

この文章を読み返してみると、10年以上経つとはいえ、その含意とこれまでの研究テーマの一貫性がいくつかのポイントとして内在していることが分かる。

①書くという「身体行為」に力点が置かれている。これは身体の動作や行為の方から体験や経験の内実を詰めていくことを意味する。リハビリテーション医療では当然であるが、精神医学や環境デザインにおいても身体性と行為を重視することにつながる。現象学的探究として「身体論」がベースとなり、志向性といった認知的特性から力点をズラす戦略でもある。さらには意識や思考という伝統哲学的に「内的」な位置に配置されるものの方からではなく、つまり直接的な体験からだけではなく、間接的で「外的」なものの方から事象に迫ることでもある。

②「思考」は書くといった「身体行為」とともに、それに遅れて形成される。行為が思考に導かれるので

はなく、書く動作とその外形に応じてフッサールの思惟が、フッサールという個体が形作られる。これはゲーテの陰に隠れて、生前、陽の目を見ることのなかった劇作家のクライストが、不意に出会う相手に話しかけてみることで自分の考えが初めて明らかになると説いたように³、あるいは10年という短い研究人生しか送れなかった発達心理学者のヴィゴツキーが、幼児は全てを口に出し「外言」にすることから徐々に「内言（発話なしの言葉）」を獲得し、思考を内面化すると想定した発達プロセスの延長上にある⁴。身体運動と行為を通して「意識」も「主体」も個体になるという統制的な研究の基本方針であり、フッサールの中・後期思想である「発生的現象学」と「受動的総合」からの影響も強い。

③書くという行為は、単に紙にインクの染みをつけることではなく、非物体的経験へのアクセスを開く。これはフッサール現象学では「理念性（イデアリテート）」と身体行為の関係性の問題である。言語、論理学、幾何学、意味、これら全てに関連するのが「理念的対象」であり、これと身体動作との関わりはいまだに謎が多い。発達心理学者のルリアの実験のように、一人で思考する際にも口腔内で舌が微妙に動いていることが分かっており、この動きを止めて思考すると精度が鈍る⁵。実際に舌を上の前歯の間に固定して思考してみてもいい。

理念性は当初から身体化されているというこの想定は、荒川修作の『意味のメカニズム』以後の制作的課題でもある。仮に人間が机にじっとしてではなく、岩山を登りながら幾何学を発明せざるをえなかった場合、幾何学の体系が今と同じように成立したのかは分からない。フッサールは身体と理念性というこの問題に、ガリレイの自然科学的な実験精神の成立から歴史を遡り、「前-幾何学的文化」の超越論的分析として取り組もうとした。晩年の論考「幾何学の起源」がそれである。

これら①から③のテーマは、半ば意識的な指針として探究の手がかりとなってきた。そしてここ数年前から、それまでほとんど扱わずにきた問題が浮上した。とはいえそれも博論の序文から読み取れるものである。

④身体行為には、その時代の技術水準と技術的な制約が浸透している。フッサールの生きた時代にはタイプライターがすでに発明されており、ニーチェは目の持病の苦悩から1882年にそれを取り入れていた。「筆記具はわれわれが思考するさいにともに作業している」⁶と手紙で書かれているように、ニーチェがアフォリズムを好んで記述するようになったことと、慣れないタイプライターの使用とは関連している可能性がある⁷。

対してフッサールがタイプライターを用いた記録は見つからないが、速記法という技術を用いることで自分の思考の速度に対応しようとしていた。現代の私たちの多くは、パソコンやスマホに慣れてしまい、紙に思考を書き付けて論文が書けるかどうかさえ覚束ない。私はもう無理である。書くという行為に内的な時代の技術的水準と環境がある。もしフッサールがペンも紙も持ち合わせていなければ、現象学のあの緻密な記述が組み立てられることはなかっただろう。これは身体や思考に浸透する技術的関与への問いである。この辺りは新しいメディアの発明が、人間の思考や認識を決定づけるというマクルーハンやハヴロックらの「メディア論」の影響もあるが⁸、やはり後述するフッサールの「幾何学の起源」が大きなヒントになっている。

徳はいかにして教育できるかを論じたプラトンの『メノン』の中で、ソクラテスが奴隷の少年に図形の面積についての知識を教える（想起させる）場面がある⁹。少年はソクラテスに導かれるままに、正方形の辺の長さと同面積の幾何学的関係について初めて自分から理解できるようになる。ここで問題になるのは、ソクラテスが、説明のための図形を地面に「棒」で描きながら少年に教えていることである。棒は筆記具であり、地面は石版や黒板のような道具である。単純とはいえここにも技術の痕跡があり、技術と身体と理念性の問題とが複合している。

もしソクラテスが、地面に棒を用いて図形を描くことができなかった場合、それでも少年は幾何学を理解できたのだろうか。古代ギリシアにおいてもすでに知識や思考は、技術や道具を通して外在化されていた。フッサールが「すべての方法の本質には、技術化されると同時に、みずからを外在化する傾向がある」¹⁰と述べたことには、看過できない洞察が含まれている。

これら4つのテーマが私の研究を導いてきたのであり、現在は④に集中的に取り組んでいる。とりわけフッサールは、ハイデガーとは異なり技術について主題的に論じていない¹¹。にもかかわらず、**人間という出来事の歴史的かつ超越論的な条件**を浮き彫りにするには、様々な時代に浸透する技術と道具の現象学的な分析が欠かせない。

フッサール現象学は、明証的な意識経験を手がかりに体験の層を詳らかにしていく方法を一貫して採用していたが、彼はその晩年に理念性の出現という出来事を、直接的な意識体験からだけではなく、人類と技術の外的な歴史からも解明しようと企てていたのである¹²。

1. 幾何学の起源に向かって

フッサールが晩年に『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』書）を書いたのは、戦争へ突入していく時代の不穏な空気を肌で感じながらであった。ガリレイ以降、自然科学はヨーロッパを中心に様々な技術的展開をもたらし、産業革命にまで発展する。その中で人間の日常生活的な世界の「意味」が忘却され、喪失してしまったことをフッサールは告発する。

この「意味」とは、無数の主体がそれを介して世界とつながる「根本的な経験＝志向性」であり、「生」そのものであるとフッサールは確信していた。ここには自然科学や技術は人を疎外し、哲学や文学は人を陶冶するというフッサールにとっても根深い人文科学的ヒューマニズムが隠されている。手を取り合って絆を確認する人間の誠実さや良心を信じるフッサールがいる。

対して物理学が扱う対象では、日常生活的な意味は度外視される。空を飛ぶ物体の軌道を計測するのに重さや形状、体積が分かれば、テニスボールなのか、リンゴなのかはどうでもよく、摩擦の影響を度外視した「質点」であっても構わない。しかも計算で用いられる「代数」も、当初は幾何学的な大きさや量を意味していたのに、それさえ忘れられ単に**技術的に運用される「ゲーム規則」**¹³となる。

「代数的計算においては、幾何学的意味はおのずから斥けられる。いや、まったく脱落させられてしまう。人は計算するだけで、せいぜい最後になって、**数は大きさを意味するはずであった**ということを出し出すくらいのものである」（以下、太字強調は引用者による）¹⁴。

これをフッサールは「幾何学の意味の空洞化」¹⁵と呼ぶ。ガリレイに端を発する自然科学は、日常生活が営まれる世界に数学的規則からなる「理念の衣」をかぶせ、**直観的な意味に溢れた生と自然**を覆い隠してしまう。だからガリレイは「発見する天才であると同時に隠蔽する天才でもある」とフッサールに揶揄されていた。

フッサールはここで自然の数量化を押し進めた「天才／犯人」としてガリレイを取り上げているが、このガリレイが、ヨーロッパを世界の覇権へと向かわせる運動に本当に加担していたのかには議論の余地が残る。たとえば、歴史学者のクロスビーは『数量化革命』において、「1200年前後の西ヨーロッパには、数量的に構成された現実世界という概念をまともに考察する者は、ほとんどいなかった」ことをまず確認し、ヨーロッパで最初の「機械時計」と「大砲」が作られた1275年から1325年の50年間に、当時のヨーロッパ人が数量的に把握できる時間と空間という概念に直面せざるをえなくなったと推定している¹⁶。彼によれば、この時代、黒死病の流行によりヨーロッパの人口の三分の一が失われたにもかかわらず、その100年後には人口は以前のピークを超え、大学を備えた都市が発達し、それまで周辺的な存在であった西ヨーロッパ諸国が世界の中心へと躍り出始める。この背後に自然の数量化が潜んでいたというのがクロスビーの見立てである。13世紀には貨幣経済による物品の数量化もかなり進んでいたことが確かめられてもいる。

もしこちらの想定の方が歴史に忠実だとすれば、ガリレイが誕生するのはその200年も先であり、自然の数量化はその頃には生活世界にしっかりと浸透していたことになる。歴史的文献をくまなく渉猟したとは思

えないフッサールの分析に正確さが欠けていたことはありうることだ。それゆえガリレイは、自然の数量化そのものを行った人物ではなく、むしろヨーロッパが世界的な覇権へと向かう象徴的人物として取り上げられたと考えるのが妥当な解釈だと思われる。

しかもそのように考えたとしても、ガリレイの自然科学的な実験精神が、フッサールの危惧する日常世界の意味の喪失にとって本質的な問題だったのかは実は微妙である。というのも、フッサール自身が「理念化された自然を**科学以前に直観される自然**にすりかえることは、ガリレイと同時に**はじまった**」¹⁷と一方で述べながら、この直観される自然が「…まさしく精密科学によって、しかも**すでに古代の幾何学以来、見捨てられてきた**」¹⁸とも述べているからだ。つまりフッサールは、日常世界の意味や、科学以前に直観される自然の喪失が、ガリレイの出現よりもはるか古代に起きていたとも想定している。だからこそ彼は、その起源へと遡り、意味を回復する必要があるとみなしたのである。

「理念的なものを操作する幾何学には**実践的な測地術(Feldmeßkunst)**が先行していたわけだが、この**測地術は理念的なものなど何一つ知らなかった**。しかしこのような**前-幾何学的作業こそが、幾何学にとっての意味の基底であり、理念化という偉大な発明の基底だった**のである。そこには**幾何学という理念的世界の発明**、あるいは『数学的実在』を通じて理念的なものに形を与える作図という、客観的に規定する方法の発明が同時に含まれていた」¹⁹。

この理念的なものを知らなかったはずの「前-幾何学的な測地術」が、ある歴史の段階以降、理念的なものを通してその方法自体を高め、自己改良する方法へと変貌する。

「**測定術(Meßkunst)**はそれ自体同時に、測定『精密さ』を高め、その完全化を高める方向へますます推し進める技術でもある。測定術は、何かを仕上げるためのできあがった方法としての技術なのではなく、それは同時に、つねに新しい技術的手段（たとえば道具）を発明することによって、**その方法をたえず新たに改良する方法**でもある。純粋数学を、その応用の場としての世界に関係させることによって、この『繰り返えし繰り返えし』ということが『無限に』という数学的意味を獲得し、こうしてあらゆる測定は、到達しえないが理念的には同一の極、すなわち数学的理念性、ないしそれに対応する数形象への近似的接近という意味を獲得する」²⁰。

最後の引用の「測定術」は、前-幾何学な「測地術」を脱して、すでに理念的なものに駆動させられ、方法の自己適用が行われる段階の技術である。この進展が後のガリレイの実験精神につながるとフッサールが見ていたことは容易に推測される。そうなるとやはり問題になるのは「幾何学にとっての意味の基底(Fundament)」がどのような経験だったのかであり、この起源の解明に『危機』書の補遺として書かれた小論「幾何学の起源」が着手することになる。

2. 起源と意味の問い

生命や人間、言語の起源といった「起源」にまつわる思考が、十八世紀以降の近代的思考の流行であると指摘したのはフーコーである²¹。彼は述べる。「近代の思考は、人間の経験を自然と生命の時間に接続させ、歴史や諸文化に沈殿した過去に接続させることで起源という領域をとおして、人間を、その同一性のうちに…再発見しようとする」²²。

確かに、プラトンの『パイドロス』でも、起源が他の何ものからも生じず、滅びることもない、つまり「始まりは始まることがない」という「起源のパラドクス」が指摘されてはいた。しかしそのように「起源」の内実を論理的、概念的に追いつめただけでなく、経験科学の知を横目に、歴史的、哲学的、生物進化的に人間

や言語等の起源を確定しようとする探究は近世以降の試みである。そしてそこには「そもそも起源を求めることは何をする事なのか」という認識論的に厄介な問題領域があり、起源を時間的、空間的に特定できるという想定こそが、近代の思考の枠内にあり限界であることの暴露にもつながる。この点に留意しながら、フッサールが「幾何学の起源」という論考で何を明らかにしようとしていたのかを確認したい。少し長い引用する。

「幾何学…の起源に関する問いは、**文献的-歴史的問い**ではなく、それゆえ、純粋幾何学の命題や証明や理論を実際に言明した最初の幾何学者たちとか、彼らが発見した特定の命題とかを尋ねることもないはずである。われわれの関心はそうしたことなく、かつて幾何学が**その中で誕生し、**＜そして＞それ以来数千年の伝統として現存したうえ、現になおわれわれにとって存在し、生き生きと働き続けている、**その最も根源的な意味**へと遡って問うことであろう。すなわちわれわれは、最初の創設者のことは何も知らないし、またそれに関してはまったく問いもしないが、**幾何学が初めて歴史に登場した——登場しなければならなかった——**ときのその意味を問うのである。われわれが知っていること、すなわちわれわれの幾何学ないしその伝統的な古い諸形態（ユークリッド幾何学のような）から遡って、すでに失われた**幾何学の始源、『創設的な』ものとして必然的にそうでなければならなかったような始原への遡行的問い**が発せられるのだ」²³。

フッサールは自らの問いが、歴史のどの時点でどんな人物が初めに幾何学を発見/発明したのか、その事実を問うことはないといっている。そうではなく、たとえ意味が空洞化したとはいえ、現在もお機能している幾何学が、人間にとって歴史上出現せざるをえなかったことの「意味」を問うという。

フッサールにとって重要なのはここでも「意味」である。ヨーロッパ文化の歴史上のとある局面に「失われた根源的な真理意味」²⁴が隠されているというのがフッサールの見立てなのだが、すでにここで幾何学の「意味の起源」と「起源の意味」とが混線している。フッサールは単なる「事実史」を提示するのではなく、その「意味の起源/起源の意味」の問い直しを通じて、現代までの人類の歴史を貫く普遍的地平を明示できると考えていた。

「いまや問題は、幾何学の全体的生成に必然的にその持続的な**真理意味**を与えることができ、また与えるべきであった歴史的な**起源の意味**を、**歴史の本質的なものに依拠して発見**することである」²⁵。

理性の絶対的信望者であったフッサールが、歴史相対的な視点を取ることはない。というより、相対的視点を取りうるには理性の歴史という普遍的地平が前提されていなければならないと彼はいうだろう。幾何学の出現には人類にとって必然的な意味があったのだと。

それに対して、この『幾何学の起源』を仏訳すると同時に長大な序文までつけたデリダが噛みつくのが、フッサールのこうした普遍性・必然性要求に対してである。

「…『起源』の問いは、フッサール自身がそれをどのように考えていたにせよ、またそれ自身としては、なおどのように興味を惹きうるにせよ、そもそも初めからして、ある種の歴史相対性によって汚染されていたことになる」²⁶。

フッサールにとって幾何学の起源が、ある歴史的事件の事実的な特定を意味しないにしても、それがどのような人間の行動特性と技術水準に相関しているのかを浮き彫りにするには、近世から古代、さらに先史へと遡る歴史状況の痕跡（テキストや遺跡、化石等々）を手がかりにせざるをえず、そこには際限のない不確定性が入り込んでしまう。そしてこの点を突く、デリダの主張には首肯せざるをえない。

そうはいっても、このこと自体は反証や修正の余地を確保する科学的な要請でもあり、健全な科学性の証である。フッサール自身が、「われわれが遡求した地平の解明は、曖昧で皮相なおしゃべりにとどまってはならないし、それ自身ある種の科学性(Wissenschaftlichkeit)に到達しなければならない」²⁷と述べていた。

したがってフッサール現象学にとっての普遍性や必然性のハードな要請を緩和しさえすれば、「純粹かつ絶対普遍的なもの」か、「汚染された相対的なもの」かといった二者択一を迫る立場の対立から、むしろ哲学の賭けは、未来の証拠によって覆される可能性があるにしても、現代の人間性を貫く経験の固有性を新たに開示できるかどうかにか切り替わる。

デリダ自身は、「前科学的文化の世界の本質かつ普遍的な構成要素とは何か、あるいはむしろ、その世界のなかで、幾何学の到来を条件づけた大変な構造とは何か」²⁸というフッサールの問いを引き受けながら、起源の問題について以下のような所感を述べている。

「歴史性の起源は、決して歴史に属しはしないだろう。事実性の秩序における理論的態度は、第二次的かつ断続的であるとはいえ、記述の可能性をまさに基礎づけているものの現象学のおよび内的発生を記述するなどは虚しいことであろう。このことは、しかし、可能なあらゆる事実的所与(地理学的、経済学的、文化的、社会学的、心理学的、等々)を使い、最も精緻な能力と最大の方法論的保障をもち、因果論、原子論、等々に譲歩することなく、この問題に対し外的かつ『平行的』な歴史的接近を企てることが、不可能ないし無益である、という意味ではない。同様にひとは、使いこなすことのできるあらゆる経験的用具の助けを借りて、最も野心的な超越論的還元の実証的発生的記述をこころみることができる」²⁹。

デリダがそのような発生的記述を試みたのかどうかはよく分からない。おそらく、それはせずに、インド・ヨーロッパ語の「エクリチュール(書かれたもの)」に巢食う有限性の問題を追い続けることに専心したのだらう。とはいえ、以上のことから幾何学の起源の問いを、フッサールとデリダのアイデアを混合させた探究モデルを用いて継続することは当然可能であり、そしてそのように進んでみたいと思っている。

3. 人間と技術：前-幾何学的経験へ向かう前の留意点

具体的論述に入る前に、哲学的営為である「現象学」に含まれる探究の制約となる条件を指摘しながら、人間と技術に関する探究の基本方針を浮かび上がらせたい。

まず、フッサール現象学にとって外せない使命のひとつに「哲学による諸学の基礎づけ」という学問的要請があるが、これに拘ることはしない。理由はいくつもある。基礎づけ、根拠づけという必然性要求は、幾何学や論理学といった記述言語以降の、さらにはカントの認識論以降の課題であるが、そもそも世界や認識の構造が論理的な推論形式に則っている保証はない。また、何をもって基礎づけの完了になるのか、それによって他の学問にどんな波及効果があるのかも明確ではなく、フッサール現象学の成立からすでに100年以上が経過したが、どのような展開見込みも明示できそうにないからである。

次に、「私たちは理性の偉大で深い問題地平の前に、すなわち、**どんな未開な人間であろうとも、『理性的動物』のうちに働く同じ理性の問題地平の前に立っている**」³⁰と主張する、フッサールのヨーロッパ中心的な理性信仰や、前節で取り上げた「理性と歴史の普遍的目的論」にも同調することはしない³¹。

現在、世界各地で生を営む未開の少数民族の中には、技術はあっても書字や幾何学を用いない人たちがたくさんいる。外の文化から何を持ち込んでも生活を変えようとはしない文化圏の人たちである³²。彼らが文明化された人間と同じ人間であるとする場合、何をもってそう特徴づけられるのか、この問いはそう単純ではない。同じ理性をもつと主張するのは簡単だが何によってそれが証拠立てられるのかは、様々なデータを見て慎重に判断すべきである。さもないければ、コロニアルな思想の専制がこっそりと入り込む危険が高い。

そもそも「眼」という器官や「羽・翼」による飛翔という行動様式は、数億年という時間の中で昆虫、魚類、恐竜、鳥類、哺乳類と多くの生物種が進化的に採用してきた。それらは自然選択による有効性が確認された歴史的証拠でもある。

対して人間の「知性」や「理性」は進化史において一度しか出現しておらず、他の種はその能力を獲得しようとしめない。さらに記述言語を伴った知性に限れば、たった七千年ほどの時間の淘汰しか受けておらず、今後どうなるのか見当もつかない。それなのにそれを普遍化できると主張するのは、相当粗暴な議論である。先にも挙げた歴史学者のクロスビーのように、人類の決定的特性は「知性」ではありえないとみなすことも当然可能である³³。

さらにもう一点、とりわけ重要なこととして、フッサールだけではなく、現象学そのものの設定の中に、人間の生きる世界は「技術」とは独立に成立し、しかもそうした世界こそが真なる存在だという**反技術的、自然的な想定**がある。これはある意味でルソーの「自然に帰れ」の再来であり、あるがままの自然に想い焦がれる「ナチュラリスト」³⁴の残滓である。先のフッサールの引用でも「科学以前に直観される自然」という表現が用いられていた。『危機』書でフッサールは以下のように述べる。

「われわれの全生活が実際にそこで営まれているところの、現実直観され、現実経験され、また経験されうるこの世界は、**私たちに技術がなかろうと(kunstlos)、また私たちが技術として何を行おうと、その固有の本質構造とその固有の具体的因果様式においては変わることなく、そのあるがままに(als die sie ist)とどまっている。この世界は、われわれが幾何学的技術とか物理学と称するガリレイ的技術のような、特別な技術を発明することによって変えられることはない**」³⁵。

人間が生きてあるがままの世界とその構造は技術なしにも成立するのに、そこに技術が外挿されることで真なる自然な世界が覆い隠されてしまった。だからその技術と理念の覆いを取り去ることで生活世界のアプリオリを見出さねばならない、そうフッサールは考えている。

しかし、ありのままの自然な世界というこの想定はかなり怪しく、デリダもこの点を指摘していた。「文化以前の純粋な自然はいつもすでに埋没してしまっている。したがってそれは、伝達の究極的可能性として、一種の接近不可能な下部理念的なものである」³⁶と。

残念ながら、現代社会を生きてる私たちは生まれた瞬間から（いや、それ以前の胎内から）隙間のない技術的環境に取り囲まれており、そこを離れた場所を生きたことがない。にもかかわらず、そうした経験が可能だと安易に主張でき、その主張に一定の市民権がナチュラリストによって与えられてしまうところに技術の問題の厄介さがある。ルソーの「高貴な野蛮人」への憧れは相当根深い。

しかもこの点に関しては、フッサールとの因縁の末に決別したはずのハイデガーの技術論とも一部重複している。というのも、フッサールは技術の延長にある幾何学の発展が「真なる意味」を忘却させたといい、ハイデガーは技術によって人間も自然も駆り立てられ、用立てられることで「真なる存在」が忘却されるというからだ。二人が認識論や存在論、自然や存在の意味について正確にどう考えていたかにズレがあるにしても、**どちらも構図上「技術なし」の人間や世界（自然）に積極的な価値を見だし、称揚しているように見える。**

とりわけハイデガーは、初期のアリストテレス解釈においてキリスト教的な伝統にまで影響を与えた古代ギリシアの存在理解が、すでに「制作された存在(Hergestelltsein)」という技術的な実践知（フロネーシス）に優位な位置から組み立てられていることを指摘し³⁷、その晩年には現代の科学技術に挑発される人間や自然の在り方に強く警鐘を鳴らした³⁸。守られるべきは、「おのれを**あるがままに**示すもの（das Sich an ihm selbst zeigende）」³⁹として、古代ギリシア人たちがもう一方で追い求めていた、技術や制作からは距離を置く「自然（ピュシス）」の知という自然信仰である。

さらに『存在と時間』以降ここに加わるのが、真なる「存在」理解に必要な、いつも隠れる存在の傍らで

それを保護し、見守る「牧人」というメタファーである⁴⁰。

「いつの日か我々は、真理(Wahrheit)という使い古した言葉をこの保護(Wahr)ということから考えることを学び、かくして経験するであろう。…存在の見張りとしての守護に対応しているのが、牧人である。この牧人は、田園的な牧羊とか自然の神秘とかにはいささかの関わりも無く、無の場の保持者であり続ける限りにおいてのみ、**存在の牧人(Hirt des Seins)**となりうる」⁴¹。

この「牧人」の解釈は、最古で最初の哲学的断想といわれるアナクシマン드로スの箴言から引き出されている⁴²。確かにハイデガーは田園的な牧羊や自然の神秘とは関係がないと念を押している。とはいえ、彼が「物」の存在理解について取り上げる「瓶」(『物』講演)や「橋」(『建てる 住む 思考する』講演)、ゴッホの農民の「靴」(『芸術作品の起源』)といった多くの事例に、こうも執拗に牧歌的なノスタルジーがまわりついているのは何故なのか⁴³。

農村で収穫を祝うワインが瓶に注がれるとき、田園を流れる川に橋がかけられるとき、風景画のようなイメージとともに郷愁が立ち昇り、そこに「人と神と天と大地とが交わり合う経験(四方界)」の豊饒さが重ね描かれる。そして現代は、そうした経験が失われつつあるのだと、さもいいたいようである。

しかし、である。瓶も橋も靴も、それなりに高度な技術の産物である。いったいどこまでの技術使用であれば、人間は存在の牧人でいられるのか。ハイデガーは明らかに四方界に基づく技術使用の範囲をどこかで限定している⁴⁴。人間が身の丈にとどまり、慎ましく存在の牧人であり続けられる範囲での技術使用は認めざるをえないからだ。だとすれば、**存在の牧人にはどんな技術が浸透しているのか。**

これはフッサールとハイデガー両者に該当することだが、一方で技術の領域を確定し、切り分け、他方で生身の自然や存在を守ろうとすると、そこに隠された技術の問いが回帰してくる。フッサールにとっては、「幾何学」や「理念の衣」に先立つ自然に含まれた前-幾何学的な技術の問題であり、ハイデガーにとっては存在の「牧人」としての技術の問題である。

前者の問いは後に譲るとして、牧人と技術の関係に触れてみたい。牧人は羊や山羊といった家畜を管理する職業であり、放牧や牧畜も含め定住するようになった人類以降の話である。人類の最初の家畜は犬が最も古く(3万6000年前)、羊や山羊、豚がそれに続き(1万2000年前)、牛(1万1000年前)、馬(6000年前)の家畜化が順次行われる⁴⁵。最初の牧羊(ムフロン)は、発掘状況から西アジア(アナトリア半島東部とイラン西部)で始まったと想定されていて、それがヨーロッパへと拡散する⁴⁶。

こうした家畜化の成立には当然、動物を躰ける「鞭」や「柵」、「通路」といった技術的工夫と発明が欠かせない。牧人が生まれるには長い年月と技術の蓄積が必要だった。その意味でも技術なしに牧人は存在できない。にもかかわらず、あれほど言葉遊びの好きなハイデガーもこの「牧人(Hirt)」という語の系譜分析は行っていない。スローターダイクも指摘するように、牧人は飼育慣らす技術を精緻にする職業であるのに、その技術の歴史を知ることが怠ったことになる⁴⁷。

9000年から6000年前に消滅したとされる「印欧祖語」にも「羊(Owis)」という単語があると想定されていて、アッカド語の楔形文字で石版に記された3800年前の「ハンムラビ法典」にも牧人や羊の記載がいくつも出てくる⁴⁸。さらに下図は、イギリスで発掘されたフェンゲイトという羊などの家畜を囲い入れるための広大な通路からなる管理システムであるが、これはおよそ3500年前の遺跡である⁴⁹。



【図 フェンゲイト一家畜管理システム】⁵⁰

これを管理していたのは奴隷かもしれないし、牧人かもしれない。アナクシマンドロスの属するミレトス学派がギリシアに現れたのが 2600 年前であることから、その 1000 年も前に家畜のシステムはこれだけ技術化されていた。ここには明らかに大量の家畜を管理する技術の萌芽がある。このような牧人の歴史を目の当たりにしたとき、ハイデガーのいう牧人はそれでも技術による挑発や駆り立てられることを回避し、ありのままの存在の声に耳を澄せられるのだろうか。

こうしたフッサールやハイデガーの技術批判への再批判は、私たちが技術の問いを扱うさいに、今から 2500 年前までの古代ギリシアの文献研究、すなわち「有史」を印づける文字資料だけに留まってはられないことを端的に示している。テキストから読み取れる意味の系譜や、文学的雰囲気だけに拘泥するからこそ、「技術を欠いた/技術化されない」自然への素朴な信仰が生まれてしまう。例えばハイデガーは、現代技術とは異なり、昔の人間がいかに技術と自然に親和的であったかを以下のように対比させている。

「かつてこれを農夫が耕作したとき、耕作とはなお、育てること、手入れすることを意味した。農夫の行為は耕地の土壌を挑発しない。穀物の種を蒔くという農夫の行為は、種をその成長力にゆだね、そしてその成長を見守るのである。いつのまにか、近年では畑地の耕作も、自然を調達するこれまでのとは別種の用立ての吸引力に巻き込まれてしまった。この用立ては自然を挑発という意味で調達する」⁵¹。

一見、良識に溢れた話のようではある。しかしこれはどこまで本当なのか。この農夫とはいつの時代の誰のことなのだろう。人類の農耕の歴史を紐解けば、それが収穫安定に向けた技術開発と品種改良、開墾の絶えざる試行錯誤だったことが分かる⁵²。だとすれば技術と親和的に生きている（ように見える）この農夫とは、ハイデガーの追憶にある幻想か、自分が見聞きした数人の農夫たちの個人的印象（バイアス）にすぎない。

こうした追憶やバイアスの背後で、どれだけの人的搾取や暴力、虐待や差別があったのか、劣悪な衛生状態や疫病、飢饉があったのかはついぞ語られない。そしてそれらを克服するために人間が技術とともにどうやって足掻いてきたのかも語られはしない。都会の喧騒を避ける山小屋にこもって、近隣の農夫とよなが語り合う、静かで優美な暮らしをしていたのであれば、それもやむをえなかったのだろう⁵³。歴史的な考証に時代の制約があったことも否めない。だとすればなおさら、自然と技術の理解のバージョンアップは必須である。仮にフッサールやハイデガーがいうように、技術のタガがいつからか本当に外れたのだとすれば、「人

間の起源」にさえ拭い切れないほどまとわりついている技術の存在とその運動に真摯に向き合ってみなければならぬ。

4. 前-幾何学的経験の光景へ

上記の現象学的な探究の留意点を考慮しながら、改めてフッサールが明らかにしようとした前-幾何学的経験の分析に取り掛かりたい。しかしそれでもまだ予備考察が十分ではなく、一步一步進んでみるしかない。

ユークリッドによる『原論』が著されたのは紀元前3世紀、万物を数として理解しようとしたピタゴラスが生きたのは紀元前6世紀から5世紀、どちらもおよそ2500年前の出来事である。「幾何学(geometry)」は「土地(geo)」の「測定(metron)」の合成語であるが、「計測する」というギリシア語の μέτρον には、「収穫・刈り取り(meto)」や、「詩のリズム」などの多様な意味が付着している。これらの語が存在したということは、それ以前にすでにそれに対応する技術とその経験があったと推測できる。フッサールは述べる。

「われわれは幾何学が発生してきた源として、その伝承されたより古い諸形態のことを知っているが、それらのどの形態においても、さらにより古い形態への指示が繰り返される。—明らかに、幾何学は、こうして**最初の獲得物から、最初の創造的活動**から生じてきたのでなくてはならない」⁵⁴。

この「最初の創造的活動」とは何かが問題になる。というのも幾何学が一度出現し、人口に膾炙すると、それがどのような言語に翻訳されようと、どのような場所で理解されようと、誰にとっても同じ客観的なものとして存在するようになるからだ⁵⁵。永遠に同一であるようなものが、歴史上に一度だけ出現したことが何を意味するのかを、フッサールは問おうとしている。

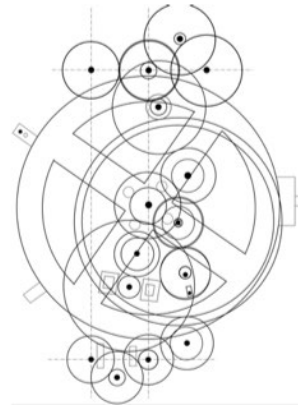
「ピタゴラスの定理も、幾何学の全体も、いかにしばしば、そればかりかいかなる言語で表現されようとも、**ただ一度しか存在しない**。それはユークリッドの『原論』においても、すべてのその『翻訳』においてもまさに同一のものである」⁵⁶。

歴史上、多くの人間が幾何学というアイデアには気づいていたのかもしれない。しかしそれだけでは幾何学は生じない。フッサールは、ある一人の心的空間内に芽生えたアイデアがもう一人に伝えられるだけでは十分ではなく、それを共有し伝達する間主観的な社会共同体と、それを書き残すための技術(文字、書物)が必要であると考えていた⁵⁷。

とはいえ、もしそうだとすればユークリッドの『原論』が著されたときにはすでに幾何学の成立は終わっていたとも考えられる。というのも、整えられた舞台の上に満を持してそれが明示化されたにすぎないからである。それゆえフッサールが明らかにしたいのは、この伝達の技術ではない。

幾何学の成立に必要なものとして、ここでは「当時の生活環境を貫いていた技術」と、「それを保存し、伝達するメディアという技術」は区別されるべきである。後者にかかわる文字と書物の出現は、明らかに七千年ほど前までしか遡れないが、しかし、たとえばホメロスの叙事詩が口承によって伝えられてきたように、前-幾何学的な知もそれ以前から伝えられてきたはずである。

この技術の区別が重要な好例として、地中海で1901年に古代ギリシアの沈没船から発見された複雑なゼンマイ機械がある。これは「アンティキティラ島の機械」と呼ばれ、紀元前百年頃に制作されたもので、37個の歯車の精密な運動を利用して太陽と月の位置を予測するものだったと推測されている。



【アンティキティラ島の機械の外観と内部構造】⁵⁸

この機械はその時代にはありえない技術水準のもので、これと同水準の時計のような機械技術が再び現れるまでにヨーロッパはこの後 1000 年を必要とした。つまり、これにまつわる技術と知識は、それを理解する共同体やメディアによる伝達がなされなかったために失われてしまったと考えられる。

にもかかわらず、この年代測定が確かだとすれば、その時代にもすでに高度な機械技術は成立していた。これと同様に、幾何学的経験を支えた技術も古代ギリシアよりもはるかに古く成立していた可能性が高く、もしそうであれば、こうした経験に迫るには受け継がれてきた「メディア／エクリチュール」だけを探っても当然限界がある。

5200 年前ほどのシュメール語という最古の文字が彫られた石板は、家畜や穀物、土地等の会計簿であったという⁵⁹。すでにその頃には図書館も完備され、書記の養成所もあった⁶⁰。この楔形文字には明らかに「数」、「直線」、「角」、「方向」に対する気づきがある。その時代（ウルク王朝）メソポタミアには都市国家が多数勃興していたことから土地の計測も確実に行われていた。ここから古代ギリシアに哲学が生まれる紀元前五世紀まで、二十一世紀という現代までの時間よりも長い数千年を人類は必要としたことになる。

シュメール文明から古代ギリシア文明までの間に、人類にとっての幾何学の出現を条件づける大きな出来事として何が挙げられるであろうか。この間、「定住」、「分業」、「農耕」、「都市」、「文字」、「交易（貨幣）」、「身分制度（奴隷と有産階級）」等が出現していたのは確かである。さらにこの「有産階級／自由人」の中から「有閑階級／暇人」が現れてこなければならぬ。技術と身分制度によってもたらされた「暇（スコレー）」は、school の原語でもあるように、学の形成を動機づけた可能性が高く、アリストテレスもそう指摘している。

「すでにこうした諸技術が全てひと通り備わったとき、ここに、快楽を目指したものでもないが、しかし生活の必要のためでもないところの認識（エピステーメー）が見いだされた。しかも最も早くそうした暇のある生活を送り始めた人々の地方において最初に。だから、エジプトあたりに最初に数学的諸技術がおこったのである。というのは、そこではその神官階級は暇な生活を送ることを許されたからである」⁶¹

この暇人は、ことさら社会活動をする必要もなく、日がな一日街をぶらつき、他の暇な人間を見つけては空き地でおしゃべりすることもできたのだろう。彼らは社会や行政に参加する義務や意欲からは独立して、ただ仲間内で話題をみつけては話し合う。そのための「前-学問的共同体」を維持する「談話スペース」のような場所が都市空間内に生まれる。

アリストテレスも言うように哲学や学問を行う者は、社会的な利害関係から切り離された「思考空間＝テオリア」を共有する必要がある、それができるのは暇人くらいである⁶²。ハイデガーも引用するプラトンの

『テアイテス』には、空をぼーっと眺めていたタレスが井戸につまずき、それを見ていた召使に「あなたは身の回りのものを何も見ていない」と冷やかされる場面がある。

プラトンの対話編を読んでいていつも思うのは、登場人物たちが人生にあくせくせずによく生きていけるなという羨望と、その背後でどれだけの人間（奴隷を含む）が暇な男たちの夢の犠牲になっていたのかという疑念である。その意味でもこの暇人も、技術によって整備された都市環境が整った段階で発明されたのである。

とはいえ、先に挙げたいいくつかの条件、とりわけ「暇」は、幾何学が「**学問**」として**出現するための**外的設定にとどまっている。というのも、幾何学的な要素である直線や平面、円といった、道具の制作や土地の計測にかかわる、より内的な技術は、『テアイテス』における**暇人タレス**の方ではなく、**実生活をやりくりする召使の実践的な経験**の中にこそ含まれているからである。フッサールもこのことには気づいていた。彼が見ていた幾何学の原場面とは以下のようなものである。

「必要に迫られる実生活において、形態のなかである種の特殊化が顕われ、技術的实践がいつもすでにある種の漸進的方向に沿って、そのつど、より好まれる形態の製作とその改良をめざした」⁶³。

理念的なものが何一つないにしても、人類は道具と技術的環境の実践的な効果を高めるための制作的な試行錯誤を行いつづけてきた。これがタレスの経験というより、召使の経験だと述べた理由でもある。フッサールが、前-幾何学的な最初の創造的活動として想定していたのは、「建物の設計、土地や道のりなどの測量の技術」⁶⁴であり、「平面の制作と完全化（研磨）」⁶⁵の技術、「公平な分配」⁶⁶に関わる知の出現であった。しかもこの原場面で人間は「さまざまな物」に出会っており、そこには人間という文化的オブジェクトも含まれていたとも考えられている。

これらの経験の細部と歴史に迫るには、古代ギリシアからシュメール文明という有史を特徴づける文字の出現に先立つ、先史時代における道具の発明がどのようなものであったのかを改めて精査しなければならない。そこにおいて初めて人間と技術の原初的光景が浮き彫りにされるからである。

註

- ¹ 稲垣論「男性原則の彼岸—男の現象学はどこまで可能か」、『現代思想 男性学の現在』（青土社、2019）、202-219 頁、稲垣論「道具：＜ポスト・ヒューマン＞以後 オワコン時代の人間と機械」、河本英夫・稲垣論編『iHuman AI 時代の有機体-機械-人間』（学芸みらい社、2019）、103-124 頁。
- ² 稲垣論『衝動の現象学』（知泉書館、2007）、vii 頁。
- ³ H.V.クライスト『チリの地震』（種村季弘訳、河出文庫、2011）所収の「話をしながらだんだんに考えを仕上げていくこと」。
- ⁴ 中村和夫『ヴィゴツキー心理学完全読本—「最近接発達」の領域と「内言」の概念を読み解く』（新読書社、2004）。
- ⁵ Karl Levitin, *One is Not Born a Personality Profiles of Soviet Educational Psychologists*, Progress Publishers, 1982, p.77.
- ⁶ F. Nietzsche, *Nietzsche Briefwechsel Kritische Gesamtausgabe*, III. 1, Walter de Gruyter, 1981, p.172.
- ⁷ F. キットラー『グラモフォン フィルム タイプライター』（石光泰夫・石光輝子訳、筑摩書房、1999）、309 頁以下。また、ハイデガーのタイプライターに関する見立ては、「文字がその本質的起源から、つまり手から奪い取られるならば、そして書くことが機械に委ねられるならば、その場合には、人間への存在の関連において、何らかの変遷が生じた」というものである。M. ハイデガー『パルメニデス ハイデッガ

ー全集 54』(北嶋美雪・湯本和夫訳、創文社、1999)、145 頁、訳文は適宜変更。

- ⁸ M.マルクーハン『メディア論—人間の拡張の諸相』(栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房、1987)、E.A.ハヴロック『プラトン序説』(村岡晋一訳、新書館、1997)。
- ⁹ プラトン『メノン—徳について』(渡辺邦夫訳、2016)、74 頁。
- ¹⁰ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 88 頁(訳文は適宜変更)。
- ¹¹ アイデは、フッサールにおけるテクノロジーの非主題性をいち早く取り上げ、彼の現象学に浸透する技術の問題を展開している。例えばフッサールの思考にとっても眼鏡やペン、机といった当時の技術が関与していることや、ガリレイ批判において、フッサールがガリレイの実験的手法の豊かさには目を向けず、数学化にのみ注目していることも指摘されている。D. Ihde, *Husserl's Missing Technologies*, Fordham University Press, 2016.
- ¹² より正確には、フッサールは、外的な歴史を通して意識の内的歴史を並行的に掬い上げようとしていた。西洋の哲学の歴史の積み重なりと、意識生における過去の沈殿とが重ね描かれている。もっと容易な例にパラフレーズすれば、人類が初めて幾何学を発見した場面と、幼児が初めて算数や幾何学を学ぶ場面とが重ね合わされているとも言える。
- ¹³ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 85 頁。
- ¹⁴ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 83 頁。
- ¹⁵ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 85 頁。
- ¹⁶ A.W.クロスビー『数量化革命』(小沢知重子訳、紀伊国屋書店、2003)、34–35 頁。
- ¹⁷ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 90 頁。
- ¹⁸ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 92 頁。
- ¹⁹ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 90 頁。
- ²⁰ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001) 77 頁。
- ²¹ M.フーコー『言葉と物』(渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、2012)、349 頁以下。
- ²² M.フーコー『言葉と物』(渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、2012)、355 頁。
- ²³ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ—序説』(田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003)、259–260 頁。
- ²⁴ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ—序説』(田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003)、286 頁。
- ²⁵ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ—序説』(田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003)、302 頁。
- ²⁶ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ—序説』(田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003)、65 頁。

- ²⁷ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、298 頁。
- ²⁸ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、198 頁。
- ²⁹ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、210-211 頁。
- ³⁰ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、304 頁。
- ³¹ この点、フッサールも自らの見解に対する反論に強く警戒していたことを記しておくのが公平であろう。「あらゆる歴史的なもの、『原始』部族の世界統覚にまでいたるあらゆる歴史的に生成してきた世界統覚の相対性について、われわれがかくも豊かな証言を獲得したあとで、今さら歴史的アブリオリ、絶対的な超時間的妥当性を示そうとしたり、示したつもりでいたとすとは、なんというおめでたさだろう。大小の民族はいずれもその世界をもっており、それぞれの世界のなかでは、神話的-魔術的にであろうとヨーロッパ的-合理的にであろうと、当の民族にとっては一切がうまく調和しており、全てが完全に説明される」（295）。こうした反論に対してフッサールは「それなしには、歴史というものが無意味な企てと化すようなまったく論駁不可能な明証の、かつて注目されたことも主題的になかったこともない妥当の基礎が、すでにそこに秘められているのではないか」と問いを進め、「普通の意味で歴史的な問題提起や呈示はいずれも問いの普遍的な地平として、明確にはないが暗黙の確信の地平として、すでに歴史を前提している」（296）ことを主張する。
- ³² アマゾンの奥地で暮らすピダハンやヤノマミは有名である。
- ³³ A・W.クロスビー『飛び道具の人類史』（小沢千重子訳、2006）、19 頁。哲学とは異なり、古人類学での人間の条件は、狩猟や採集、道具の発明、火の使用、投擲、料理、歯、共同作業といった外的痕跡からの類推になる。
- ³⁴ ここでのナチュラリストとは、哲学的な議論の最奥に自然（状態）が存在すると考えるだけでなく、「魂」や「家族」、「婚姻制度」、「絆」、「誠意」、「真心」、「意志」、「努力」といった人間性に根づく自然性を固く信じている人々のことを言う。
- ³⁵ E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、2001）92-93 頁。
- ³⁶ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、117 頁。
- ³⁷ ハイデガーのこの指摘は、古代ギリシアにおいてすでに技術的視点が限なく浸透していたことの傍証として重要でもある。M.ハイデガー『アリストテレスの現象学的解釈 『存在と時間』への道』（高田珠樹訳、平凡社、2008）、98 頁、齋藤元紀「フロネーシスからソフィアへー初期ハイデガーのアリストテレス解釈の帰趨一」、『Heidegger-Forum Vol.2』（2008）、64 頁。
- ³⁸ M.ハイデガー『技術への問い』（関口浩訳、平凡社、2013）。
- ³⁹ これはハイデガーの「現象」の定義であり、正確には「おのれをそれ自身に即して示すもの」であるが、これを他のものによる歪みなく、そのままの有り様で自らを示すこととして理解することは可能である。
- ⁴⁰ 「牧人」のメタファーに加えて、「言語は存在の「家」である」という「家」のメタファーもある。家も技術の産物であり、さらには定住という人類が技術を一層展開させるための経験とも関連している。
- ⁴¹ M.ハイデッガー『杣径』（茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳、創文社、1988）、389 頁。
- ⁴² それ以外にもこの牧人に関して、「人間は存在の主人ではない。人間は存在の牧人である」という対比で

「主従」の категорияにおける「弱者/貧者」を指すものとしても用いられている。「人間は、牧人のもつ本質的な貧しさを得るのであり、牧人のもつ尊厳さは、存在それ自身に依って存在の真性を守ることの内へ呼び入れられているということに、存する」。M.ハイデガー『道標』（辻村公一、ヘルムート・ブフナー訳、創文社、1985）、432 頁、訳文は適宜変更。

- ⁴³ スローターダイクは、人間を存在の牧人とすることでハイデガーは、人間にラディカルな抑制をかけ、人間を徹底的に飼い慣らされるように仕向けたと批判している。P.スローターダイク『「人間園」の規則』（仲正昌樹編訳、御茶の水書房、2000）、49 頁。
- ⁴⁴ ハイデガーは『技術への問い』において、テクネーがその最初はポイエーシスの一種で、詩的な何ものかであったが、現代技術はそうではなくなってしまうと述べている。この文脈で *Gestell* や *Bestand* という技術批判の用語が出てくるが、そこには同時にどこまでの技術は許容でき、どこから技術が詩的ではなくなったのかという線引き問題が際限なく現れる。M.ハイデガー『技術への問い』（関口浩訳、平凡社、2013）。
- ⁴⁵ P.シップマン『ヒトとイヌがネアンデルタール人を絶滅させた』（河合信和監訳、柴田譲治訳、原書房、2016）、B.フェイガン『人類と家畜の世界史』（東郷えりか訳、河出書房新社、2016）、R.C.フランシス『家畜化という進化』（西尾香苗訳、白揚社、2019）。
- ⁴⁶ D.W.アンソニー『馬・車輪・言語 上』（東郷えりか訳、筑摩書房、2018）、94 頁。
- ⁴⁷ スローターダイクはこの牧人技術についてプラトンの『ポリティコス』を参照することで人間の家畜化について論じている。P.スローターダイク『「人間園」の規則』（仲正昌樹編訳、御茶の水書房、2000）、54 頁。
- ⁴⁸ 『ハンムラビ「法典」』（中田一郎訳、LITHON、1999）。このテキストから「灌漑管理責任」や「隔年耕作制度」において家畜を休耕地で放牧させる習慣があったことも分かる。
- ⁴⁹ B.フェイガン『人類と家畜の世界史』（東郷えりか訳、河出書房新社、2016）、93 頁。
- ⁵⁰ B.フェイガン『人類と家畜の世界史』（東郷えりか訳、河出書房新社、2016）参照。
- ⁵¹ M.ハイデガー『技術への問い』（関口浩訳、平凡社、2013）、26-27 頁。
- ⁵² V.シュミル『エネルギーの人類史』（塩原通緒訳、青土社、2019）。
- ⁵³ M.ハイデッガー「なぜわれらは田舎に留まるか？」、『30 年代の危機の哲学』（清水多吉・手川誠士郎編訳、平凡社、1999）、127-137 頁。
- ⁵⁴ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、262 頁。
- ⁵⁵ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、264 頁。
- ⁵⁶ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、265 頁。
- ⁵⁷ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、272 頁。
- ⁵⁸ <http://www.antikythera-mechanism.gr/>
- ⁵⁹ 小林登志子『シュメル—人類最古の文明』（中公新書、2005）、39 頁。
- ⁶⁰ F.バエス『書物の破壊の世界史』（八重樫克彦・八重樫由貴子訳、紀伊国屋書店、2019）、46 頁。
- ⁶¹ アリストテレス『形而上学（上）』（出隆訳、岩波文庫、2007）、25 頁。訳文は適宜変更した。
- ⁶² この暇人は、奴隷に支えられ、飢餓に苦しむことなく、それなりの身分保障が与えられた自由人の中から出

現すると予想される。社会的な生産活動に従事しながらも、その余暇を持てる人間にも当てはまるだろう。

⁶³ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、300頁。

⁶⁴ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、301頁。

⁶⁵ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、300頁。

⁶⁶ E.フッサール『幾何学の起源 J.デリダ-序説』（田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、2003）、300-301頁。